

# 中国語母語話者の終助詞「よ」の 運用に関する問題点

## —「よ」と対応する中国語表現との

## 対照研究から—

山田 京子

キーワード

終助詞「よ」・語気助詞・中国語母語話者<sup>1</sup>・文脈・初級教科書

### 1. はじめに

コミュニケーション能力の育成が重視される日本語教育では、終助詞「よ」は「ね」とともに早くから習得すべきものとして扱われている。また、学習者の運用に関する問題も、多数指摘されている（上野 1972、大曾 1986、伴・架谷 1996 ほか）。それにもかかわらず、教科書解説は意味の記述が中心であり、話し手がどのような場面で、どのように感じた時に用いると、どのような表現効果があるのかといった段階に踏み込んだものは少ない。

中国語にも、日本語と同様、文末に用いる助詞として、話者の気持やモダリティを表す“语气助词（＝語気助詞 以下、語気助詞 と記す）”<sup>2</sup>がある。それらは、多様な表現効果を持ち、「ね」、「よ」に近い働きをするものもある。また、いくつかの日本語教科書<sup>3</sup>は、「ね」、「よ」に対応する中国語表現として、数種類の語気助詞を具体的に挙げている。しかし、似たような表現効果を持つものであっても、意味や機能までが同じとはいえない。

本稿では、終助詞「よ」の使用場面を整理し、中国語で対応する表現との対照を行う。また、中国語母語話者にとって、習得が難しいと思われる「よ」のいくつかの用法について、運用に関する調査の結果を考察する。最終的に、中国語を母語とする学習者のみならず、その他の日本語学習者にも効果的な終助詞の教授についての基礎研究としたい。

### 2. 伝達態度のモダリティ<sup>4</sup>を表す「よ」、および中国語の語気助詞に関する先行研究

「よ」は、聞き手に対する話し手の文伝達の態度を表すモダリティ形式の一つである。陳（1987）、益岡（1991）などでは、「ね」と対立するものとしてとらえられてきた。「ね」が聞き手が持っている想定される知識や意向の在り方と一致するという話し手の判断を表す「一致型の判断」なのに対し、「よ」は対立する「対立型の判断」を表すとされてきた。

その後、聞き手が知らないことでも、「よ」を使用しないときがあるという使用の随意性から、聞き手の情報の概念を廃した説明が試みられる。白川(1993)では、「よ」の機能を、「その発話が確実に聞き手の耳に入るよう聞き手の注意を喚起する」とし、蓮沼(1996)では、「よ」は「文脈に認識上の何らかのギャップの存在を表示するとともに、そうした状況における認識能力の発動、あるいは認識形成に対する指令を表す」と説明した。これらの研究を踏まえて、野田(2002)では、「よ」の性質を「その文の内容が認識されるべきだと話し手が考えていることを表す」とまとめた。以上のように、「よ」の機能は、聞き手への認識を促す態度を示すことに集約される。本稿では、「よ」の基本的機能を、話し手が聞き手に、文を認識するよう要求することとする。

一方、中国語の語気助詞は普通、文末に置かれ、「語気」を表す助詞とされる。しかし、齋(2002)によれば、この「語気」の意味に、いまだ統一的な解釈は見られない。「語気」が表す内容は様々であるとされ、胡(1981)では、「語気」は「話し手の気持を表す」とし、「感情表出語気」「態度表出語気」「気持表出語気」に三分類している<sup>5</sup>。また、劉ほか(1983)では、語気助詞は単独で、或いはイントネーションや他の品詞と一緒に様々な語気(話し手の表現意図や情意を示す語調)を表すとした。儲(1994)でも、「語気は発話者の願望や心的態度を反映している。1つの文が表す語気は、イントネーション、語句、文法形式、語気詞、コンテキストなどの諸要素が作用して形成される」との記述がある。

本稿では、終助詞「よ」に対応する表現を考察するのが目的であり、ここでは語気助詞の機能について、ひとつずつ先行研究を挙げることはしない。以下、呂(1980)、劉ほか(1983)の分類をまとめ、「よ」に近い表現を持つ語気助詞について「語気」の意味を記す。

- 啊・a…… ①命令、願望の語気を表す。命令文の文末に“啊”を用いると「言い含める、注意を促す」という意味を表す。催促の意味を表すこともある。  
②誇張、賞賛、感慨、嘆息などの語気を含む。  
③平叙文の文末に用いて、説明する、注意を促すという意味を表す。
- 吧・ba…… ①請求や命令の語気を表す。典型的な命令文は語気助詞を用いないが、命令文に“吧”を加えると語気がやや和らげられ、勧告の意味を帯びる。  
②事実を述べたり、状況を説明したりする肯定の語気を表す。平叙文の文末に“吧”を用いると、意見、希望に賛成することを表す。
- 呢・ne…… 肯定の語気。形容詞述語文、動詞述語文の後に用いられ、誇張の意味を含む。対比的な文に現れ、対比されている一方を強調する意味がある。
- 嘛・ma…… 肯定の語気。話し手が「道理として当然こうである」、「明らかで分かりきったことである」と考えていることを表す。

このように、中国語の「語気」は、話者の命題に対する態度、気持を含んだものであり、日本語では様々なモダリティの範疇に属すると考えられる。語気助詞は、文末につき、終助詞と似たような働きをすることから、中国人学習者の中には、母語の影響から終助詞の運用に問題がでるのではないかと考える。

### 3. 終助詞「よ」の使用場面

次に、終助詞の運用力の育成を考え、「よ」がどのような場面で使用されるのか整理する。本稿では、話し手の発話時の状況に対する判断に注目し、「よ」の現れる文脈<sup>6</sup>を3つの用法に分類し命名する。同時に、映画のシナリオと小説から抽出した例を挙げ説明を試みる。

#### 1) 注意喚起用法

話し手は、聞き手が発話内容を認識していない、もしくは知らない状況にあると想定している。「よ」の使用例として典型的ケースである「切符が落ちましたよ」の文は、聞き手に欠けた認識形成の指示に当たる。発話内容は、聞き手にとって大切である、認識させなければならないと話し手が判断したものでなければならない。

(1) 遠藤「もうすぐ始業式始まるよ」

桐島「うん」

(「blue」)

#### ◆「注意喚起」の「よ」

【発話時の状況】話し手は聞き手に自らが発話しようとしている内容についての情報、認識が欠落していると想定。

【話し手】聞き手に欠落していると思われる、聞き手が認識すべき情報、認識をもつ。

【聞き手】話し手の情報を認識できる。

【機能】聞き手に注意を促し、新たな認識を形成後、どうするかを問いかける。

【表現効果】新しい情報を提供→気付き、警告から行動展開へ。

#### 2) 認識要求用法

この用法が用いられるのは、話し手が聞き手に発話内容に関する情報および認識が無いことを先行発話などを通してすでに知っているときである。発話内容は、先行発話により要求された情報、もしくは、話し手が相手に認識してほしいと考える内容である。

(2) 杉山「こんなところで、どうしたんですか」

たま子「やだ。私、ここでアルバイトしてんのよ。一人もんでしょ、レッスンない日はすることないし、踊らないのも寂しいからここでダンサーしてるの。一人で来たの？」

(「shall we ダンス?」)

#### ◆「認識要求」の「よ」

【発話時の状況】話し手は、聞き手が発話内容についての情報、認識がないと知っている。また、当該発話の認識を妨げるものはないと想定している。

【話し手】聞き手に認識してもらいたい情報がある。

【聞き手】話し手の発話内容について情報がない。話し手の発話内容を認識できる。

【機能】聞き手に自らの発話内容を認識させる。

【表現効果】新規内容の書き込み→説明、提案、命令など。

## 3) 修正要求用法

話し手は、発話時、既に聞き手は自らと異なる認識を持っていることを確認している。また、話し手は聞き手の態度やその認識を修正すべきであると感じている。

- (3) 一ノ瀬 「ワンちゃん、ごめん。サクちゃんキレると暴走するから」  
 作太郎 「暴走なんかしてねえよ!なんでこんなやつにお前が謝るんだよ」  
 (『楽園のつくりかた』)

## ◆「修正要求」の「よ」

【発話時の状況】話し手と聞き手の現状への認識が異なると判断できる。

【話し手】聞き手が認識している状況を受け入れられない。聞き手が認識すべき状況があると考えている。

【聞き手】話し手と異なる認識を持つが、話し手からもたらされる状況を認識できる。

【機能】聞き手に自らが想定している状況を認識させ、修正を強制。

【表現効果】現状のとらえなおしを要求→説明、非難、命令の強制、説得。

終助詞「よ」については、現行の教科書では「知らないことを相手に告げる」といった解説が中心であり、話者の伝達態度が見えてこない。そのため、このように、発話時の状況をどのようにとらえたかという文脈を示すのは、運用能力を育成するために欠かせないことであると思われる。各用法における機能を意識することができる場面の中で、表現効果を考えて練習が行われることが必要であろう。特に、中国語母語話者にとって、同様の表現効果を有するものでも、話し手の判断の上に「よ」が用いられていると整理することで、語気助詞とは異なる終助詞の概念を形成していくことができるのではないかと考える。

## 4. 終助詞「よ」に対応する中国語表現

本章では、「よ」の各用法を貫く「聞き手の耳に入れるために、注意を喚起する」という基本的機能を、中国語ではどのように表すかを分析する。小説の対訳<sup>7)</sup>においては、次のような例が観察された。

- (4) <どれが鹿島槍なのか尋ねられて>  
 「こっちが爺ヶ雷で、その向うが鹿島槍だよ」  
 「南槍と北槍があるよ」 (『あした来る人』)  
 [訳文] “前面是爷山, 后面就是鹿岛枪。”  
 “分南枪和北枪。” (《情系明天》)
- (5) <「入るとき誰もいなかったのか」と勝手に入ったことを婉曲に咎められて>  
 「誰もいなかったよ」 (『こころ』)  
 [訳文①] “谁也没有在呀!” (《心》①)  
 [訳文②] “一个人也没有呵。” (《心》②)
- (6) <パンツ一枚でいるのをとがめられての説明>  
 「水をまいているんだよ」 (『あした来る人』)  
 [訳文] “正在洒水啊!” (《情系明天》)

- (7) 「十箇月私が何もしないでいたら、それだけで私はひどい責任を負うのよ。人殺しと同じくらいに重大なことだわ。唯じっとして何もしないでいることで、そんなのよ」 (『死者の奢り』)
- 〔訳文〕 “十个月什么都不做的话，那我就要负责相当大的责任呢。还不是和杀人同等重大的事情吗。什么都不做就那么放任自流的话，就是如此啊” (《死者的奢华》)
- (8) <目が覚めている相手に起きるよう促す>
- 「起きなさいよ。」 (『雪国』)
- 〔訳文①〕 “起床吧！” (《雪国》①)
- 〔訳文②〕 “你起来吧。” (《雪国》②)
- 〔訳文③〕 “起来吧。” (《雪国》③)
- (9) <生まれたての子犬の寒さを想像できない妻に>
- 「当り前じゃあないか。生れたてだからまだ寒いよ。」 (『あした来る人』)
- 〔訳文〕 “那还用问？刚出生，怕冷嘛！” (《情系明天》)
- (10) 「あんた、そんなこと言うのがいけないのよ。起きなさい。起きなさいってば。」 (『雪国』)
- 〔訳文②〕 “你这么说可不行！你起来，我要你起来。” (《雪国》②)

実際、コーパスを用いて用例を抽出した際には、語気助詞を用いずに表されたものが数量的に一番多い<sup>8</sup>。「よ」は、(4)のように、情報を表す文を聞き手に認識してもらうためにも使われることがあるのに対し、中国語では語気助詞でそのような話者の意図は表現されない。発話内容に対する驚きや不満といった感情、肯定、非肯定、強調といった態度、または依頼、命令などの気持を表す必要がなければ語気助詞は用いられなくてもよい。

しかし、(5)から(10)の例のように、様々な語気助詞が下接し、表現効果の点で「よ」と同じような働きを示すこともある。(5)、(6)では「啊」<sup>9</sup>を用いることで、事実や状況を説明する肯定の語気を付加する。また、(7)は「呢」を用いて、聞き手に説明し、認識を要求している。(8)は、目覚めている相手に起きるよう促す。イントネーションにより変わるものの、「おきなさい」に、何うような高いイントネーションの「よ」がつくことで、命令を認識させる提案になり、強制力が弱まる感じがする。「吧」で、命令の緩和を表す。さらに、(9)のように、命題を当然と考える語気「嘛」の使用も観察された。<sup>10</sup>犬の寒さを想像することができない相手の認識を修正させる「修正要求」の「よ」の働きに対応したものである。(10)のように、感嘆符で「よ」の働きを示す表現もある。

このように、「よ」に対応する中国語表現はさまざまである。しかし、「よ」が表す表現効果の点で、似たような意味を有する語気助詞があることから、中国語を母語とする学習者は「よ」を運用する際、これらの知識を想起してしまうのではないだろうか。語気助詞は、話者の感情を表すことが第一義であるため、単に情報を示すだけの発話内容に「よ」を用いることができない可能性が考えられる。また、発話者の強い感情を伝える必要がなければ、終助詞を用いず、会話にぎこちなさが生じるおそれもあると考える。

## 5. 中国語母語話者における終助詞「よ」の使用状況とその意識に関する調査

本章では、中国語を母語とする学習者の終助詞使用の状況と意識に関する調査（山田2005）の結果を分析する。調査はすべてアンケートで実施。対象者<sup>11</sup>は、いずれも日本語能力試験1級合格者である。日本滞在歴6ヶ月以上のグループJ 50名と日本滞在歴のないグループCの50名。内容は、初級で提出される「よ」の用法についての設問が中心で、【設問A】は、応答ペアを示し、コンテクストに応じて「ね」、「よ」の使用および不使用「×」を記入するものである。完成した文について中国語への翻訳を行った。また、【設問B】は、中国語の発話を示し、述語部分もしくは、文末を日本語に翻訳する設問を用意した。「よ」と「ね」の使い分けなど、全部で11問調査したが、本稿では、なかでも、習得が困難であると考えられる「注意喚起」、「認識要求」の「よ」の運用に関する設問【A1】【A6】【A7】【B1】【B2】【B3】を取り上げ分析する。

## 5. 1 「注意喚起用法」、「認識要求用法」の「よ」の運用に関する調査

【設問A1-②】は、注意を喚起し、問いかける「注意喚起」の用法を問う設問である。また、自分の発話を認識してほしいと要求するだけなら、「認識要求」の「よ」となる。ここでの「よ」については、相手の認識に「修正を求める」といったニュアンスはない。

## 【設問A1】

|  |  |
|--|--|
| 妹：お兄ちゃん、明日出発だ（　　）。<br>私、10時なら見送りに行ける（A1-②）。<br>兄：来なくていい（　　）。 | 妹：哥，你明天_____。<br>10点的话_____。<br>哥：_____。 |
|--|--|

話し手が「行ける」という事実を聞き手に伝えるものである。ここでの「よ」の選択率は、グループJで37名、グループCで40名であった。<sup>12</sup>その一方で、「ね」を用いた者が両グループあわせて9名、終助詞を用いず、言い切りの「×」を選んだものが、14名いる。「ね」を選択した回答者の中国語訳は、いずれも、「私が行ける」という内容を相手に伝える肯定の態度を示している。しかし、中国語で示された意図に反して、「ね」を用いた回答が意味するのは、兄への「確認」となり、発話者の意図と異なっている。「10時なら、自分が行ける」ということを伝え、その上で、兄の意向を尋ねるなら、言い切りを用いるのではなく、「よ」の使用がより適当であろう。

本稿では「よ」に焦点を当てて、分析しているが、このように、「ね」と「よ」の混同が見られることから、「話し手が認識した内容について聞き手に了承を求める」機能を有する「ね」と「よ」との使い分けをきちんと指導していく必要がある。

【設問A6】は、田中さんを探すAに、「会議室にいた」という情報を伝えるものである。

## 【設問A6】

|   |                       |
|---|-----------------------|
| A：田中さんはここにいる？<br>B：田中さんなら、会議室で見た（A6-①）。 | A：田中在这儿吗？<br>B：_____。 |
|---|-----------------------|

話し手Bは、この内容はAが知っておいた方がいいと判断している。「よ」を選んだ者がグループJで44名、グループCで39名いた。【設問A1-②】と比べると、グループJでは若干の増加があるものの、同程度の割合で「よ」が選ばれている。この設問でも、「ね」を選んだものは【設問A1-②】と同様100名中9名であるが、【設問A1-②】と【設問A6-①】2つで「ね」を選んだものは3名であり、同じ回答者ばかりが、不適当な選択をしているわけではない。「×」を選択したのも同様に、同じ回答者ばかりが言い切りの形を選んでいるわけではない。

【設問A7-②】は「認識要求用法」の設問で、ケーキを食べたAが、そのことを知らないと想定し、Bに知らせた方がいいと感じている情報「ケーキがおいしいこと」を知らせるものである。

【設問A7】  
 A：このケーキ食べてみて( )。 A：尝尝\_\_\_\_\_  
 とても、おいしい (A7-②)。  
 B：どれ?あ、本当においしい( )。 B：哪个?啊, \_\_\_\_\_

ここでは「よ」を用いるのが適当であろう。また、始めに「このケーキを食べて( )」とケーキを勧めていることから、「おいしいね」と同意を求める状況ではない。ここでも「同意」を要求する「ね」を選択したものがグループJで4名、グループCでは8名いた。また、「×」を選択し「とても、おいしい」にしたものも各グループに3名ずついたが、これでは、行為を要求した相手へ働きかけた理由が伝わりにくくなる。

また、中国語訳では「よ」を用いたものの中には「啊」、「呢」などの語気助詞を用いて訳したものが、グループJで25名、グループCでは24名いた。半数近くが、この「よ」に感嘆のような強い語気を感じ、語気助詞と同じような働きをするものとして見なしているようである。

次に、記述式での設問に対する回答を見ていく。<sup>13</sup>

【設問B2】  
 A：你的钱包掉了。 A：財布が\_\_\_\_\_ B2-(A)。  
 B：哦。谢谢。 B：あら。ありがとうございます。

【表1 B2-(A)の解答と人数】

<グループJの解答>

被調査総数 50名

|     |  | 解 答 |  | 人数 | %  |
|-----|--|-----|--|----|----|
| ね   | なくなったね (1)   |     |  | 1  | 2  |
| よ   | 落ちましたよ (14) 落ちたよ (8) 落としたよ (6) 落としますよ (2)<br>落ちましたよ (1) おちったよ (2) 落ちてしまいましたよ (1)<br>落ちてるよ (1) 落ちてしまったよ (1) 落としてしまいましたよ (1)<br>おろしちゃったよ (1) |     |  | 38 | 76 |
| その他 | 落ちた (4) 落としました (3) おちました (1) おとした (1)<br>落としてしまった (1) 落としてる (1)  |     |  | 11 | 22 |

## &lt;グループCの回答&gt;

被調査総数 50 名

|     | 解 答   | 人数 | %  |
|-----|---|----|----|
| ね   | 落としたね (2)   | 2  | 4  |
| よ   | 落ちましたよ (4) 落ちますよ (1) 落ったよ (1) 落ちたんだよ (1)<br>おちちゃったよ (1) 落ちてしまいましたよ (1) 落とされたよ (1)<br>落としたよ (落したよ) (3) おとしたんだよ (1) 落としたんですよ (1)<br>落としましたよ (1) おとすよ (1) 忘れたよ (1)   | 18 | 36 |
| その他 | 落ちました (7) 落としました (落しました) (5) 落とした (3)<br>落ちた (2) 落ちたんだ (1) 落ちてしまいます (1) 落ちました (1)<br>落ったんです (1) 落しちゃった (1) 落としてしまいました (1)<br>落してしまった (1) 落しましたが (1) 落します (1) 落とりました (1)<br>おとってしまいました (1) 落ろした (1) 下ろしてしまった (1) | 30 | 60 |

【設問B2】では、グループJとグループCでの「よ」の使用率に大きな差があった。グループJでは、選択式と同程度の38名(76%)が「よ」を用いているが、グループCでは、その半分以下の18名(36%)しか「よ」を用いた訳で答えていない。「財布が落ちた」というのは事実であり、感情を伝える文ではない。前章で述べたように、感情や確信を表す肯定、強調といった態度を表出しないのなら、語気助詞は必要ない。設問の中国語と同様、「財布が落ちた」という情報を述べるだけで、相手に伝えることができる。一方、日本語では情報を伝える文であっても、その情報が相手にとって重要で、耳に入りたいと考えるなら「よ」を用いるのが自然である。中国で学んでいるグループCには、特に、話し手が聞き手にとって必要だと判断した客観的情報を認識させる、この「よ」の用法の運用に対する理解が不足していると考えられる。

次に認識要求の「よ」の回答を見ていく。【設問B1-(B)】は、「白い建物は何か?」という問いかけに対し「新しくできた図書館である」ということを告げるものである。

## 【設問B1】

A: 你看。那儿有座白色的大厦吧。是什么大厦?

B: 那是新盖的图书馆。

A: あそこに、白いビルが\_\_\_\_\_。あれは、なんですか?

B: 新しくできた図書館\_\_\_\_\_ B1-(B)\_\_\_\_\_。

【表2 B1-(B)の解答と人数】

## &lt;グループJの解答&gt;

被調査総数 50 名

|     | 解 答                           | 人数 | %  |
|-----|-------------------------------|----|----|
| ね   | ですね(5) だね (1)                 | 6  | 12 |
| よ   | ですよ (23) だよ (9)               | 32 | 64 |
| その他 | です (8) だ (2) なの (1) があります (1) | 12 | 24 |

## &lt;グループCの回答&gt;

被調査総数 50 名

|     | 解 答   | 人数 | %  |
|-----|---|----|----|
| ね   | ですね(5) だね (2)                               | 7  | 14 |
| よ   | ですよ (12) だよ (4) よ (1)                       | 17 | 34 |
| その他 | です (22) かもしれません (1) であります (1) これは (1) だ (1) | 26 | 52 |



この設問で、「ね」を用いた回答者が両グループ合わせて、13名もいる。ここで「ね」を用いると、聞き手に確認することになり中国語の文意とあわない。また、グループJで「よ」を使用した回答者が32名(64%)いたのに対し、グループCでは17名(34%)だった。「よ」を使用した回答と、言い切りの形とに大きな違いは感じられないが、「よ」を用いたものには、発話内容が聞き手にとって大切な内容であり認識して欲しいといった態度がうかがえる。待遇上配慮が必要な相手には「新しくできた図書館です」と言い切りの形でも問題ない。しかし、言い切りの形は、時として会話の発展を妨げるような感じを与えることもあるのではないかと考える。

次に【設問B3 - (B2)】の回答について考察していく。

|                |                                    |
|----------------|------------------------------------|
| 【設問B3】         |                                    |
| A: 这本书真有意思。    | A: この本、本当におもしろい_____。              |
| B: 是啊。我也看了好几次。 | B: そうだ_____。何度も_____ B3-(B2)_____。 |

【表3 B3 - (B2) の解答と人数】

<グループJ>の解答>

被調査総数 50名

|     | 解 答  | 人数 | %  |
|-----|--|----|----|
| ね   | 読んだね(2)読みましたね(2)見ましたね(1)見たね(1)<br>見られましたね(1)   | 7  | 14 |
| よ   | 読みましたよ(1)読んだよ(よんだよ)(2)見たよ(5)<br>見たんだよ(1)見たよ(1)読んだのよ(1)読んだんだよ(1)                        | 31 | 62 |
| その他 | 読みました(3)見た(みた)(2)読んだことがある(1)見てた(1)<br>見たことがあります(1)読んだ(1)読んでいた(1)読んでみた(1)<br>読んでしまった(1) | 12 | 24 |

<グループC>の回答>

被調査総数 50名

|     | 解 答   | 人数 | %  |
|-----|---|----|----|
| ね   | 見たことがありますね(1)見たんですね(1)見ましたね(1)<br>見ましたよね(1)見たよね(1)  | 5  | 10 |
| よ   | 読みましたよ(7)読んだよ(7)見たよ(4)見たよ(1)<br>見た事があるよ(1)見ましたよ(1)読んでいたよ(1)<br>読むことがあるよ(1)                                    | 23 | 46 |
| その他 | 読みました(8)見ました(3)読んだ(2)見た(1)見てきました(1)<br>見たことがあります(1)読むことができました(1)読んだの(1)<br>読んだんだ(1)読んでいました(1)読んでだ(1)私も見ました(1) | 22 | 44 |

この設問の解答としては、新情報を認識してもらう文意を表すのが適当と考えられるが、「ね」や「よね」を用いて、自分の行った行為を相手に確認してしまっている誤りがグループJで7名、グループCでも5名に見られた。また、ここでも【B1 - (B)】と同様、言い切りの形を用いたものは、グループCの回答者に多い。終助詞が用いられずとも、丁寧体を用いれば、「聞き手目当て」であるということは認識できる。しかし、Aの認識を指示するような発言に、「よ」を用いないことで、聞き手の耳に入れようという積極的姿勢が感じられない。かえってぎこちない発話になり、談話を作っていく意図が弱くなっている。上級レベルなら、応答ペアのレベルというミクロ的な視点だけでなく、談話構成へと発展

させるマクロ的視点からの指導も必要になってくるのではないか。グループJにおいては、学習環境から、自然習得が進んだことも推測できる。一方、中国で学習するグループCの運用に問題がある要因の一つとしては、教科書が考えられるであろう。次章では、中国で使用されている教科書が終助詞「よ」をどのように提出しているかを分析する。

## 6. 中国の日本語初級教科書における「よ」の提出について

### 6. 1 中国で出版された教科書における「よ」の解説

次に、教育現場で終助詞「よ」がどのように提出されているかを知るため、中国で出版されている初級日本語教科書の文法解説を観察する。

#### ●『新編日語1』（1993）上海外語教育出版社

高等教育機関で用いられる教科書で20課の構成である。

『新編日語1』 第9課 (p.162)

八. 終助詞「よ」表示加强语气 (\*終助詞「よ」は語気を強める)

○わたしですよ。

終助詞「よ」接在句末加强句子的语气，表示主张，叮嘱，或唤起对方注意。

(\*「よ」は文末につき文の語気を強める。主張や言い含め、相手への注意喚起を表す)

○わたしは行きませんよ。

○李さん、友達が来ましたよ。

(\*は、中国語に対応する ( ) 内の文が筆者の訳であることを示す。以下、同様。)

#### ●『大学日語予備級 1』（1995）高等教育出版社

『大学日語 予備級』は、高等教育機関で使用される教科書『大学日語』を学ぶ前の、初級段階に用いられる教科書である。『大学日語 予備級1』は、12課からなる。

『大学日語 予備級1』第3課 (p.47)

2、语气助词 よ (\*語气助詞 よ)

接在句子末尾，用来表示说话人的强烈的主张或提醒听话人注意的语气。

(\*文末につき、話し手の強い主張や聞き手への注意喚起の語気を表すときに用いる)

①「李さんの専攻も日本語ですか。」「いいえ、英語ですよ。」

②「写真の人は誰ですか。」「はくですよ。」

③張さんのお兄さんは大学生ではありませんよ。もう先生ですよ。

④「これが王さんですか。」「そうですよ。」

⑤公園は市内ですよ。

#### ●『中日交流 標準日本語初級 自学教程 上』（1995）大連出版社

『中日交流 標準日本語』は、日本語を専門としない学習者が用いるものとしては、中国国内で広く普及している教科書である。教科書本冊の説明はかなり少ないことから、ここでは、その解説書である『中日交流 標準日本語初級 自学教程』をとりあげる。

『中日交流 標準日本語初級 自学教程 上』 第7課 (p. 102)

4～よ

“よ”は終助詞、接在句末。“よ”有多种用法。本課中的“よ”是用于加强叮咛，告诫，提示或劝诱等语气的。相当于汉语的“呀”，“啊”。使用时，发音不能过重，否则会有强加于人的感觉。

(\*「よ」は終助詞で文末につく。「よ」はいくつもの用法がある。この課での「よ」は言い聞かせたり、たしなめたり、助言やすすめなどの語気を強める。中国語の「呀」や「啊」にあたる。発音が低すぎると、おしつけがましい感じがする)

・お父さんは夕方6時ごろ帰りますよ。

・お母さんの誕生日は明日ですよ。

・映画はもうすぐはじまりますよ。

以上のように、中国で出版されている教科書の中には様々な問題点がある。「よ」を「語気助詞」として分類していたり、例文の提示が一文のみのものが多く、どのように運用すべきなのかが分かりにくい。また、「意見の強調」や「強い主張」という自分の発話内容を強調するという説明が多く、発話内容に対する記述が見られない。

## 6. 2 終助詞「よ」の提出に関する初級教科書への提言

6.1のように、中国の教科書の問題点は、終助詞「よ」の運用に問題を生じさせる一因となりうる。調査で判明した、問題点を踏まえた上で、教科書に以下の提言を行いたい。

1. 中国の教科書には、発話内容に関する記述が不足している。3章で示したように「よ」は「聞き手」が知らないことについて用いるのが基本であることを理解させる。
2. 中国の教科書では「よ」の機能は、「強い主張」や「強調」といった記述が中心であるが、中国語では強い主張を表さない事実の描写でも、話者が聞き手の耳に入れる必要があると感じたなら、「よ」を用いないと不自然になることを確認させる。
3. 教科書には「啊」や「吧」と「よ」は同じとの記述があるものがあるが、表現効果の点で重なり合うと感じられるものの、基本的機能は同じではない。語気助詞は、話者の情意により加えられることが多いのに対し、日本語では、発話時の状況をどのようにとらえたかということが重要となる。また、「語気」は表される範囲が非常に広く、「文への伝達態度」ととどまらない。「よ」を「語気助詞」と説明するのではなく、日本語の「終助詞」を訳文に用いる方が適当ではないか。
4. 文法解説の例文の多くが一文のみで、応答ペアになっていない。どのような状況で「よ」が用いられているのかがわかりにくい。話し手が発話時にどのような判断をしたから「よ」が用いられたかという文脈を示す必要がある。初級段階では、発話時の状況判断が易くなるような文脈を示す必要がある。具体的には、本稿で述べた、聞き手が話し手に命題の情報がないと判断する「注意喚起」、聞き手が話し手に命題の情報がないと知っている「認識要求」、さらに、聞き手の有する情報を修正させる命題を述べる「修正要求」の3つの観点から整理していくのも一つの手段となるのではないか。
5. 「よ」を用いないことによるコミュニケーションの阻害についても、学習者に知らせる必要がある。「言い切り」の形を用いることで、時として会話を続行させるムードを遮断してしまう可能性があることを理解させる。このように、「よ」を用いる場合、用いない場合の効果を把握してこそ、運用能力が高まるのではないかと思う。

## 7. まとめと今後の課題

以上、中国語を母語とする日本語学習者の終助詞「よ」の運用に関する問題点を、中国語の語気助詞との対照、および、中国で出版された教科書の解説から分析してきた。まず、先行研究をもとに、「よ」の使用場面を分析し、話し手の発話時の状況判断という観点から、誰が、誰に、何のために用いるのかという記述を行った。学習者に分かりやすい状況を示すため、話し手の聞き手の認識状態に対する判断という視点から「注意喚起」、「認識要求」、「修正要求」の3つに分類し整理した。運用力育成のためには、各用法の機能が意識できる場面で、表現効果を考えて会話練習が行われることが必要だと考える。中国語母語話者にとって、話し手の判断の上に、「よ」が用いられていると整理することで、語気助詞とは異なる終助詞の概念を形成していくことができるのではないか。

次に、日本語の小説の会話文と中国語の訳文の対照を行ない、中国語では、終助詞「よ」をどのように表現しているかを考察した。語気助詞を用いずに表現されたものが多いが、「よ」の対訳に、似たような表現効果を持つ語気助詞が選ばれたものもあった。

また、中国語を母語とする学習者の「よ」の運用に関する調査結果を分析した。話者の気持ちを表す命題については、学習者は、「よ」の対訳に語気助詞を用いて、似たような表現効果を表そうとした。しかし、「注意喚起」の用法では、中国で学習する者の多くが「よ」を用いて解答することができなかった。「よ」は、中国の教科書が示す「文の語気を強める」働きではなく、「文を相手に認識させる」働きととらえるべきである。また、中国で学習する学習者は「よ」を用いないことで、談話の応答がぎこちないものになることがあった。応答ペアだけでなく、談話という視点からの指導も必要になると思われる。

最後に、中国で出版された教科書の文法解説をもとにどのように終助詞「よ」が提出されているか考察を行った。結果、運用能力を高めるためには、さまざまな問題点があり、記述が不足していることを指摘した。

以上のように、本稿では終助詞「よ」に対応する中国語表現との対照を試みできた。しかし、終助詞は、イントネーションにより用いられる場面も異なる。今後は、音声面からの考察も必要があると感じている。また、学習者の習得状況については、今回はアンケートのみであるので、学習者の使用意識をより詳細に知るためには、発話時の状況をどのようにとらえたかを調査する必要があると考えている。

## 注

- 1 本稿では、方言による差を考えず、広く中国語すなわち、普通話をもととする学習者ととらえる。
- 2 文末に接続し、話し手の気持、態度を表すとされる助詞は、「語気詞」および「語気助詞」と呼ばれる。中国語文法では、二つとも用いられ、研究者により用いられる言葉が異なる。本稿では、「語気」を表す「助詞」として「語気助詞」を採用し、「語気副詞」などと区別する。
- 3 『中日交流 標準日本語自学教程』(1995 大連出版社)、『新編 日語』(1997 吉林教育出版社)。
- 4 益岡(1991)で提唱されているもので、聞き手に対する話し手の文伝達の態度を表すモダリティのことである。
- 5 「感情表出語気」は、周囲の事物或いは相手の話の内容によって引き起こされたある種の感情を表す。例えば、賛嘆、驚き、訝り、不満など。「態度表出語気」は、自分の発話内容に対する態度を表す。

- す。例えば肯定、非肯定、強調、婉曲など。「気持表出語気」は相手にある情報を伝達することを表す。例えば、依頼、命令、質問、詰問、呼びかけ、応答承諾など。
- 6 ここでは、川口(1996 ほか)により提唱された、「文脈化」の概念を参考に、文脈の提示を行なう。
- 7 ここでの用例の抽出は、『中日対訳コーパス』(北京日本学研究中心2002)による。各例の文末に( )で小説名を記す。以下、同様。
- 8 山田(2005)による。語気助詞の使用は任意であることから、比率は求めていないものの、小説上の「よ」の対訳を、語気助詞を使って表したものは、3割程度に過ぎなかった。
- 9 語気助詞「啊」は、接続した前の語の音により、表記が「呀」や「呵」に変化する。
- 10 木村・森山(1992)では、「嘛」は「命題が真であることを話し手自身が確とした上で、なお聞き手にも同様の認定を積極的に求めることを示す」としている。
- 11 調査対象者の日本語学習歴は、2年半から10年。
- 12 アンケート結果の詳細は、すべて山田(2005)を参照。
- 13 回答を見ると、アスペクトの表し方など終助詞の使用以外の問題が相当数存在するが、ここでは、終助詞の使用だけに焦点をあててみていくこととする。

## 参考文献

- 上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』第17号 日本語教育学会
- 大曾美恵子(1986)「誤用分析1「今日はいいい天気ですね。」-「はい、そうです。』」『日本語学』第5巻9号 明治書院
- 川口義一(1996)「日本語指導の文脈化」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』北海道国際交流センター
- 木村秀樹・森山卓郎(1992)「聞き手情報配慮と文末形式-日中両語を対照して-」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
- 白川博之(1993)「「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」」『日本語教育学紀要』3号 広島大学教育学部
- 陳常好(1987)「終助詞-話し手と聞き手の認識ギャップをうめるための文接辞-」『日本語学』6-10 明治書院
- 野田春美(2002)「第8章 終助詞の機能」新日本語文法選書4『モダリティ』くろしお出版
- 蓮沼昭子(1996)「終助詞「よ」の談話機能」『言語探究の領域 小泉保博士古希記念論文集』大学書林
- 伴 紀子・架谷真知子(1996)「誤用からみた終助詞「ね」の指導法」『アカデミア 文学・語学(61)』南山大学
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 山田京子(2005)「伝達態度のモダリティの対照研究」早稲田大学日本語教育研究科修士論文
- 胡 明揚(1981)「北京語における語気助詞と感嘆詞」『中国語言語学情報1 語気詞と語気』于康/成田静香 訳 好文出版社
- 齋 滬揚(2002)《語気詞と語気系統》安徽教育出版社
- 儲 誠志(1994)「語気詞の意味分析-「啊a」を例として-」『中国語言語学情報1 語気詞と語気』村松恵子/張勤 訳 好文出版社
- 劉 月華・藩文娛・故 wei(1983)相原茂監訳(1996)『現代中国語文法総覧』くろしお出版
- 呂叔湘(1980)《現代漢語八百詞》商務印書館

## 【用例出典】

- 周防正行「shall we ダンス？」シナリオ作家協会編 『'96年鑑代表シナリオ集』映人社 1997
- 中園健司「楽園のつくりかた」日本脚本家連盟編『テレビドラマ代表作選集2004年版』2004
- 本調有香「blue」シナリオ作家協会編 『'03年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会 2004